ISSN 2188-7330

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター

第13号
2020年1月発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

CONTENTS

AIがくずし字を読む時代がやってきた
古典籍共同研究事業センター ……❶〜❸
異分野融合共同研究「古代の甘味「あまつら」の復元とその試食」
立命館大学グローバル・イノベーション研究機構（異分野融合共同研究 研究代表者） 助教 神松 幸弘 ……❹〜❺
碑文のデジタル復元に関する手法研究と実践 ひかり拓本の開発
国文学研究資料館 客員研究員 上椙 英之 ……❻〜❼
「津軽デジタル風土記 ねぷた見送り絵リブート！ ～デジタルアーカイブからよみがえる北斎の女たち～」展レポート
国文学研究資料館 准教授 木越 俊介 ……❽〜❾
第五回日本語の歴史的典籍国際研究集会
新潟大学 准教授（国文学研究資料館日本文学若手研究者会議議長） 中本 真人 ……❿
こんな古典籍があった！ ～拠点大学古典籍画像紹介～ ……⓫
トピックス ……⓬

AIがくずし字を読む時代がやってきた

古典籍共同研究事業センター

国文学研究資料館（以下「国文研」）では、文部科学省大規模学術フロンティア促進事業の一つである「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」の一環としてテキスト化実証試験を進めています。デジタル撮影された古典籍を翻刻していく過程で生まれたくずし字文字の情報等を広く研究者コミュニティなどに利活用して貰うため、一字一字の字形と、その版面での座標軸情報をもったデータを、「くずし字データセット」として、平成二十七年十一月から人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）の協力の下でオープンデータとして公開してきました。

くずし字データは、文字認識などの研究を進める際に、機械学習用データなどへ活用ができ、くずし字解読の自動化、効率化などの推進が期待できます。大規模なデータをオープンにしたことを契機に、様々な取組が情報学研究者を中心に現在起こっているのです。平成二十八年には電子情報通信学会パターン認識・メディア理解研究会（PRMU）で毎年実施されるアルゴリズムコンテストにおいて、「古典籍画像の指定領域に含まれるくずし字を認識し、各字のUnicodeを出力する」という課題が出題され、くずし字認識の研究の活性化につながりました。くずし字についての関心は、大阪大学等が当館公開画像などを活用した「くずし字学習支援アプリKuLA」を開発するなど、以前から大変高まっており、「くずし字データセット」は時宜に叶った公開であったと思います。

〈「日本文化とＡＩシンポジウム2019」報告〉

ＡＩがくずし字を読む時代がやってきた

古典籍共同研究事業センター

山本副センター長による報告の様子

そして本年七月から十月にかけて、機械学習モデルを構築するコンペティションのプラットフォームとして世界的に著名なKaggle（※）において、「くずし字認識：千年に及ぶ日本文化への扉を開く」と題し、コンペティションを開催しました（国文研・CODH・国立情報学研究所（NII）主催）。使われたくずし字データは全て国文研が作成したデータで、世界中の人々が課題に取り組んだ結果、ＡＩによるくずし字認識率九十五パーセントを達成するとともに、くずし字、古典籍の認知が格段に広まりました。

※　Kaggle（カグル）。サイトの一番上に「The Home of Data Science & Machine Learning」（データサイエンスと機械学習の家）と書かれているように、世界中の機械学習・データサイエンスに携わる約四十万人が集まるコミュニティーで、データサイエンティスト／機械学習エンジニアと組織を繋げるプラットフォームとなっている。企業や政府等の組織が「Competition（コンペティション）」形式（競争形式）で課題を提示し、賞金と引き換えに最も精度の高い分析モデルを得るというのが特徴

コンペティションの結果を受けて、令和元年十一月十一日（月）にシンポジウム「日本文化とＡＩシンポジウム2019　～ＡＩがくずし字を読む時代がやってきた～」を、一橋講堂（東京都千代田区）で開催しました。シンポジウムの前半は、奈良文化財研究所の馬場基氏による「木簡情報のオープンデータ化と文字画像ＤＢ連携の強化」、東京大学史料編纂所の井上聡氏による「東京大学史料編纂所における字形データの蓄積経緯と花押データへの展開」など、木簡に記された文字から、花押、くずし字に至るまで、日本の文字文化研究に取り組む第一線の研究者たちにより、最先端の研究が紹介されました。午後には、九州大学大学院システム情報科学研究院の内田誠一氏による「文字認識研究の過去・現在・未来」、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の佐々木孝浩氏による「過去からの挑戦状―くずし字認識の未来―」など、ＡＩによるくずし字認識の展望を踏まえた基調

表彰式の様子

講演が行われました。お二人の基調講演は、高度な専門的な知見を大変わかりやすくお話いただき、充実した時間を共有することが出来ました。次いで、当館古典籍共同研究事業センター山本和明副センター長から、くずし字データが量的なマイルストーンであった一〇〇万文字の大台を越え、当日より「日本古典籍くずし字データセット」として公開されたことが報告され、CODH北本朝展センター長からこの日に一般公開されたくずし字解読ＡＩソフトウエア「KuroNet」のほか、デジタル人文学研究の推進に大きな役割を果たすＡＩについて紹介がありました。

「KuroNet」で翻刻された「徒然草」
使用した画像：http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200019959/viewer/2

今回のシンポジウムの中で、Kaggle入賞者の表彰式と入賞者による講演も執り行ないました。国内だけではなく、スペインなど海外に居住する上位入賞者五人に対し、当館キャンベル館長から、賞賛の言葉とともに賞状と記念品が贈呈されました。その後、五人が登壇し、それぞれが開発したくずし字認識アルゴリズムについて解説をしました。そこでは、一つの文字をバラしたり重ね合わせたり、また、機械に覚えさせる文字を厳選したりするなど、三ヶ月におよぶコンペティションにおいてなされた様々な工夫が紹介されました。

展示ブースの様子

二百二十名を超える来場者で埋まった会場では、熱心にメモを取りながら講演や発表を聴講する参加者の姿が多く見られ、また、展示ブースでは国文研が持ち込んだ万葉集や伊勢物語絵巻などの古典籍に見入ったり、「KuroNet」による翻刻を体験したりする姿が見られました。実際にくずし字を読み解く技術がいまどこまで進んでいるのか、その可能性を体感していただくよい機会となりました。

国文研では、今後、さらに多くの古典籍をＡＩの力を借りて翻字していけるよう、その基盤となる字形データの拡充を図るとともに、広くオープンデータとして公開し、社会的な貢献につなげていくこととしています。

なお、本シンポジウムの発表資料等ならびに当日の様子も確認することが出来ます。以下のＵＲＬをご参照いただき、当日の様子や研究の最先端を覗いてみてください。

http://codh.rois.ac.jp/symposium/japanese-culture-ai-2019/
https://www.youtube.com/channel/UCD_RQdMon7gz1E2AQUSDtcA

【異分野融合共同研究】

古代の甘味「あまつら」の復元とその試食

立命館大学グローバル・イノベーション研究機構助教
（異分野融合共同研究　研究代表者）
神松（こうまつ）　幸弘（ゆきひろ）

古代に砂糖の代わりに使用されていた甘味料に甘葛煎（あまづらせん）があります。中世以降に生産が途絶えてしまって、今は幻の調味料になっていますが、その特徴を文献に頼ると、つる性の植物の樹液を煮詰めたもので、水飴のように糸を引き、砂糖のように甘いものだったと推定されます。また、『延喜式』によると、正月に行われる大臣らの饗宴において、食事と酒宴の最後に出されたのが、『今昔物語』などでも登場する芋粥です。芋粥とは自然薯を削り切りしたものを鍋で甘葛煎と炊いて作るいわゆるデザートでした。芋粥は貴族でも滅多に食べることのできない特別なご馳走でした。

ところで肝心な甘葛煎の原料のつる性植物は諸説あり確かなことはわかっていません。しかも、原料とされる複数の植物の樹液をとり、その性質を比較検討した研究はなされていませんでした。このような背景から私たちは、歴史的典籍NW事業の一環として、異分野融合共同研究「料理・調味料の復元と活用に関する研究」にて甘葛煎の正体を探るプロジェクトを行っています。主に国文学研究資料館の入口敦志教授が甘葛煎に関する古典籍の探索を、そして神松がつる性植物樹液の採集と化学分析を担当しています。去る二〇一九年八月三日に開催された立命館グローバル・イノベーション研究機構（R-GIRO）シンポジウム「超長期的視点から見た人口・環境・社会」が立命館大学と国文学研究資料館の共催で行われました。その中で、私たちは「古代の甘味「あまつら」の復元とその試食」という一般向けの特別シンポジウムを企画・実施しました。

報告では、入口先生から、『枕草子』や『宇津保物語』など平安時代の古典籍から、甘葛煎に関する記述では保管する容器についてもかき氷や芋粥として食べるときにも金や銀など金属製の食器や道具がセットになって登場することを指摘し、当時最高の贅沢をあらわしていたと考えられるという話題を提供しました。また、神松はつる

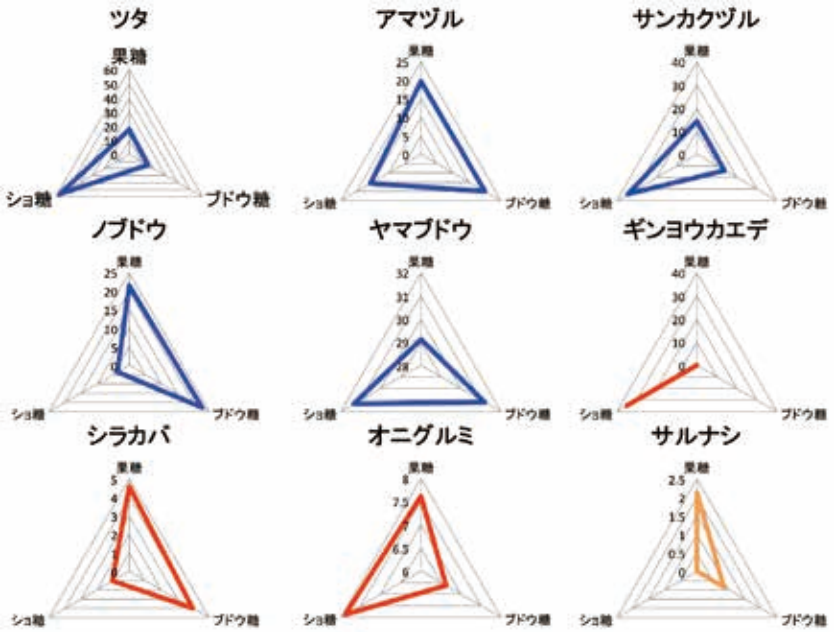

図１　樹液中に含まれるショ糖、ブドウ糖、果糖の定量比較

性植物の樹液に含まれる糖分を高速液クロマトグラフィーで分析した結果を紹介し、従来から有力な原料と目されているツタ以外にも野生のブドウ科植物複数種も糖分の高い樹液がとれ（図1）、甘葛煎のような性質を持つシロップが作られることを発表しました（写真1）。イベント当日は、原料の異なる2種類（ツタとアマヅル）をもとに作成した甘葛煎を用意し、かき氷にかけて来場者に食べ比べてもらいました（写真2）。来場者は、かき氷を食べ味や風味の違いを楽しみながら、遥か古代に思いを馳せていました。中には甘葛煎を食べるのが長年の夢だったという方もいたり、多くの方に喜んでいただきました。現在私たちは、芋粥の再現にも取り組んでいます。古典籍の記述を紐解き、包丁技術や、材料、道具の吟味と調達を進めています。そして、自然薯が収穫される冬には、芋粥の試食を含めたシンポジウムを開催することを計画しています。

写真１　様々な樹種から作った甘葛煎

ところで、甘葛の原料植物は本当には一体何だったのでしょう。『延喜式』によれば、平安時代には全国二十一カ国から三石近い甘葛煎が集められていたとされています。はたして単一の原料種で気候風土の異なる様々な地域からこれほど大量に集めることができたのでしょうか。私たちは、複数のブドウ科植物から、甘葛煎様の甘味料を作ることに成功しました。このことからそれぞれの地方で様々な甘葛煎が作られていた可能性も考えられます。一方で、各種から作られた甘味料は、種ごとに甘みや風味が大きく異なります。甘味料という特質を考えると、より洗練された風味の良いものが選択された可能性も否定できません。それだからこそ特別な「甘み」となったとも言えます。まだまだ「あまつら」をめぐる冒険は尽きそうにありません。

写真２　甘葛煎をかけたかき氷

碑文のデジタル復元に関する手法研究と実践
ひかり拓本の開発

国文学研究資料館　客員研究員　上椙（うえすぎ）　英之（ひでゆき）

石造物、特に石碑は表面に刻まれた文字「碑文」に所縁のある土地に建立されることが多く、設置された地域の様々な事象と密な関係を示す資料である。

碑文の示す内容は多岐に亘るが、古戦場跡や故事の現場など歴史事象の地であることを示す名所・旧跡碑、歌に詠まれた風景など、その土地に所縁のある文学作品を紹介する歌碑や文学碑、武将や政治家・俳人・作家などの偉人の墓碑など、歴史・文学・偉人といった観光衝動を刺激する事例が多く見られる。また、近年では東日本大震災に際して、過去の津波の到達場所に在り「これより下の土地に家を立てるな」との警告を記した石碑が人々を救ったことや、平成三十年七月豪雨において、過去の水害を記し警告が刻まれた石碑がある場所で、再度多くの命が失われたことで、特に石碑に刻まれた碑文の精読と利活用が求められるなど、観光や防災など地域資源としての価値が見直されている。近年頻発する自然災害と、その過去の教訓を刻んだ碑文に注目されるようになり、二〇一九年には国土地理院は災害の教訓を刻んだ石碑に「自然災害伝承碑」と特別な呼称を与え、新たな地図記号を作成し、全国にその所在・詳細を募るまでに至った。この様に、石造物は従来研究対象としていた歴史学や民俗学、考古学以外にも、文学・観光学・防災学など多分野での利活用が期待され、その活用方法が各分野で模索されている。

しかし、碑文の利活用を考える上で、先ず解決しなければならないものが風化による、石造物それ自体の劣化である。石造物のほとんどは屋外に在り、長期にわたる風化作用の為、表面に凹凸によって刻まれた文字情報は失われつつある。表面が削れて起伏に乏しくなった石造物は、写真はもとより、現地での判読も難しい（図1）。

また、読めたとしても、看板などと比べて可読性が低く、読むための意識と時間とを割かなければ読めない状態のものが多い。その為、特に日常

図1　兵庫県須磨区禅昌寺　伊藤博文歌碑

生活の中では、石造物は「普段の景色」の中に溶け込んでしまう。結果、地域住民がその価値に気付かぬまま、打ち捨てられるように放置されている事例も多い。可読性の低さは、都市化や復興工事に際して、現地では碑文の示す情報が判別できず、廃棄は免れても本来の機能を失う場所に移設されるなど、風化による文字情報の減衰に加えて、移設による本来の機能（位置の特定など）の喪失、廃棄による資料そのものの喪失といった危機の原因ともなっている。

更に石造物の活用を考える上で、文化財指定される資料だけに留まらず、単体では価値が見出し難い碑文も、データベース化し、面で捉えることが重要な意味を持つことは言うまでもない。しかし、石造物は、広範囲に散財する上、数も多く、また現地での碑文の判読まで含めると、一件の調査に時間がかかりすぎるため、研究者や自治体担当者の努力だけではなかなか進まない。

筆者らが開発した、ひかり拓本は処理時間や機材などコストのかかる三次元計測を捨て、碑文の可視化・デジタル化のみを目標とすることで、大幅なコストをカットした、紙本拓本のデジタル化という位置付けの技術である。凹凸で表現された碑文を視認・撮影する際、多くの場合、側光法（Raking Light Method）が採られる。側光法では、表面に対して比較的浅い角度で光を照射し、作成される影よって、表面起伏（石造物の場合は碑文）を把握し易くする。これらの手法は石造物調査時に文字を確認する際にも用いられる手法である。ひかり拓本では、従来の調査方法である側光法で碑文を撮影し（図２上段）、その撮影画像から文字の影のみを抽出する。（図２中段）その結果を見ながら更に影を追加し、最終的に文字の影を全て撮り終えると、碑文の拓本画像が完成する（図２下段）。撮影に特殊な機材は必要なく、市販のカメラと固定用の三脚、明るめのハンディライト、画像処理用の計算機があれば、画像処理は開発したアプリがほぼ自動で行う。本アプリは目的を碑文の抽出に絞ることで画像処理負荷低減を図っているため、現地でのリアルタイム解析が可能であり、再調査など調査の負担の軽減をしている。また、撮影機材の軽量・単純化、撮影法の低難度化は、現代の石造物調査の主体を担う幅広い一般層が、技術的も機材的にも容易に導入できるという特色を持つ。

今後は、早期のアプリのリリースと、GPSによる石造物へのナビゲーション機能、石碑と国文学研究資料館が公開する「新日本古典籍総合データベース」とをリンクさせ、観光地で、歌碑や文学碑に刻まれた碑文をキーとして情景や土地に所縁のある古典籍に親しむ、新しい観光行動の創出を進める仕組みを実装していく計画である。

図２　ひかり拓本サンプル

「津軽デジタル風土記　ねぷた見送り絵リブート！
～デジタルアーカイブからよみがえる北斎の女たち～」展レポート

国文学研究資料館　准教授　木越（きごし）　俊介（しゅんすけ）

国文学研究資料館では、二〇一七年度から弘前大学をはじめとした津軽地方の諸機関と、共同プロジェクト「津軽デジタル風土記」を進めてきた。これは当館が推進する「文献観光資源学」の中の一つに位置づけられ、具体的には、津軽関連の史資料をデジタルアーカイブしながら、観光資源として有効活用する道を探るというものである（全体像については、本紙第9号の瀧本壽史氏「津軽デジタル風土記の構築」に向けて」をご参照いただきたい）。今回の展示はプロジェクトの成果の一環として位置づけられ、弘前市のギャラリー森山にて、二〇一九年十月四日（金）から六日（日）の三日間にわたり開催、来場者は一七七名であった。

弘前のねぷたは、青森市などの人形ねぷた（組ねぷた）のような立体構造物とは異なり、二次元の絵が描かれる扇ねぷたが中心となる。その前面の「鏡絵」には武者など勇壮な絵が描かれることが多いのに対し、後面の「見送り絵」は女性像が主たる画題となる。今回の展示は、北斎らが描いた女性像をもとに、新たな見送り絵を創出しようというコンセプトのもと、弘前市在住のねぷた絵師・川村岩山（がんざん）氏が描き下ろした三十点の色紙作品の初披露となった。

弘前のねぷた絵の歴史をひもとくと、その第一人者であった竹森節堂（せつどう）（一八九六～一九七〇）以来、その素材には北斎やその弟子が描く水滸伝や伝奇小説の挿絵が多く使用されてきた。川村岩山氏の師・長谷川達温（たつおん）（一九二一～一九八九）も、やはり江戸時代の小説挿絵から着想を得ていることが、残された作品や下絵の分析から明らかになっている。

そのようなねぷた絵作成プロセスのDNAを継承し、デジタル画像化された北斎らの絵にもとづき、新たな見送り絵として令和の世に問おうというのが、今回の展示の出発点にある――「reboot（リブート）（再起動する）」にはそんな思いを込めたつもりである。何の脈略もなく古典を現代化するのではなく、地域の文化特有の文脈を理解し、それを掘り下げた上で企画化したところに、アカデミックな機関が地域の観光に寄与する意義があると思われる。

実際の作品から一例を掲げると、葛飾北斎の描いた笠屋三勝（かさやさんかつ）（曲亭馬琴作『三七全伝南柯夢（さんしちぜんでんなんかのゆめ）』文化五年〈一八〇八〉刊の登場人物）が、川村岩山氏の手により、色鮮やかで躍動感のあるね

葛飾北斎による笠屋三勝
曲亭馬琴作『三七全傳南柯夢』国文学研究資料館所蔵
https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200005790/viewer/6

川村岩山氏の手による笠屋三勝

ぷた絵として再創造されているのがお分かりいただけると思う。元絵の方は、江戸時代の十九世紀に盛んに出版された「読本」と呼ばれる伝奇小説の口絵である。読本の作者としては馬琴や山東京伝、口絵・挿絵などは北斎などの浮世絵師が手がけ、大いに人気を博した。

今回の三十点の元絵の絵師のうちわけを記すと、北斎が十四点、その弟子の蹄斎北馬が九点、歌川豊広が四点、歌川豊国、国貞、浅山蘆国がそれぞれ一点である。

展示のキャプションには、各キャラクターや作品の説明に加え、QRコードを付すことによって、元絵のデジタル画像にリンクしてその場で参照できるようにした。この点は、来場者アンケートを見ても、「QRコードからネットへの誘導という立体的な展示内容が新しい」「QRコードで原画を見られるのがとても面白かった」などの声が寄せられ、高い評価をいただくことができた。一般の方が古典籍に触れるまたとない機会となったことは、本プロジェクトの意義からしても喜ばしい。さらに各作品の人気投票も行い、結果は三月に弘前で開催するシンポジウムで発表予定である。また、このアンケートと投票にご協力いただいた方には、展示作品のポストカードのプレゼントも行った。ポストカードにもQRコードを付したが、これが投函されることで、展示作品、そして古典籍の魅力がさらに広く発信されることを期待している。

また、展示会場となったギャラリー森山は、古民家を改装した古式ゆかしい空間であるとともにフリーWifiが完備しており、今回の展示環境としてはまたとない場であったことも書き添えておく。

なお国文研においても、年明けから、展示スペースの一部を借りて巡回展を行う予定である。元絵の古典籍が国文研に所蔵されているものについては、ねぷた絵とともに展示し、直に比較することができるので、ぜひ足を運んでいただきたい。

ねぷた絵の伝統を継承しながら、デジタル技術を通して創出された作品群が、今後のねぷた絵の一つの指標となれば幸いである。また、この展示をご覧いただきねぷたに関心をもたれたら、毎年八月一日から開催されている弘前ねぷたまつりの熱気を直接肌で味わってほしい。

ギャラリー森山での展示風景

第五回日本語の歴史的典籍国際研究集会

新潟大学　准教授
（国文学研究資料館日本文学若手研究者会議議長）
中本（なかもと）　真人（まさと）

令和元年十一月十五日（金）、第五回日本語の歴史的典籍国際研究集会が国文学研究資料館大会議室で開催されました。国内外から多くの出席者が参加したほか、会場の模様はインターネットを通じて、ライブ配信されました。冒頭、ロバート キャンベル館長、人間文化研究機構の佐藤信理事の挨拶があり、続いて齋藤真麻理実行委員長から研究集会の趣旨とプログラムの説明が行われました。

午前は、谷川惠一氏が「総合書物学は何を目指すのか」の研究報告を行いました。昼のランチセミナーを挟んで、午後は岩坪健氏の基調講演に始まり、続く国際共同研究「中近世日本における知の交通の総合的研究」では、芳澤勝弘、猪瀬千尋、ダヴァン ディディエの三氏によるパネル発表と質疑応答がありました。最後に荒木浩氏、クリスティーナ ラフィン氏、ダニエル ストリューヴ氏、張龍妹氏、そして司会のキャンベル館長を交え、「国際化する研究環境―人文学の場合―」をテーマにラウンドテーブルが行われました。

本研究集会は、歴史的典籍ＮＷ事業とともに発足し、今年は十年計画の折り返しとなる五回目になりました。事業の中核をなすデータベース構築や異分野の研究交流も着実に進展し、事業の成果に基づく研究活動も発表されています。研究集会では、このような幅広い研究活動を体感できた一方で、私自身が今後どのように事業と関わっていくべきか考えさせられました。芸能を専攻する立場として、文字だけでは表現できない「知」に注目した報告には、大いに共感を覚えました。その一方で、研究対象の総体が膨らめば膨らむほど、次第に自分から遠ざかっていくかもしれない。巨大なデータベース、国際的・学際的ネットワークが構築されることによって、かえって研究が細分化、専門化してしまうのではないか。長い人間の営みを対象とするだけに、知の総体を次に生かすための方策が必要になるように感じました。

次への方向性を示すものとして、来年四月発足予定の「国際コンソーシアム」はひとつの可能性だと理解しています。終盤のラウンドテーブルにおいて、登壇者や出席者から示された経験談や国文学研究資料館に対する要望は、地方国立大学で教育研究活動する立場からも共感されるものでした。国境を越えた研究交流はもちろん、国内でも中央と地方をつなぐ場も必要だと思います。現在私の関わっている日本文学若手研究者会議から、将来を見据えた提言を積極的に出していきたいと考えています。

第5回日本語の歴史的典籍国際研究集会の様子

こんな古典籍があった！～拠点大学古典籍画像紹介～第５回

歴史的典籍ＮＷ事業では、二〇一五年度から、拠点大学における古典籍の撮影を実施しています。新日本古典籍総合データベースで公開された古典籍から、各大学おすすめの一点をご紹介していきます。

●神戸大学附属図書館総合・国際文化学図書館所蔵『播磨名所続膝栗毛一編追加（はりまめいしょ ぞくひざくりげいっぺんついか）』十返舎一九（著）、文化癸酉（一八一三）［序］

DOI: https://doi.org/10.20730/100273633

附言によると、『続道中膝栗毛』の二編（宮嶋参詣）刊行後、三・四編で舞台は木曽路に移ったが、名所旧跡がある播磨を飛ばしたのは心残りという書肆（しょし）の勧めで出版されたという。上巻は宮嶋参詣後、姫路から高砂を経て明石まで巡り下巻へ続くが、残念ながら上巻のみの所蔵である。なお、神戸大学附属図書館で昨年度開催した古典籍の資料展では、本事業で電子化された画像を用いることで容易に状態確認等の準備を行うことができ、所蔵館としても電子化の恩恵を実感した。

（該当部分を見る：https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100273633/viewer/6）

●筑波大学附属図書館所蔵『貞享暦（じょうきょうれき）』渋川春海（著）安倍泰福（校）、書写年不明

DOI :https://doi.org/10.20730/100259772

幕臣渋川春海（しぶかわはるみ）が日本で初めて作成した日本独自の暦法書。貞享二年（一六八五）から七十年間にわたってこの暦法により、暦（カレンダー）が作られた。それまで日本では中国唐代の「宣明暦（せんみょうれき）」が平安時代貞観（じょうがん）四年（八六二）から約八百年間使用されていた。そのため十七世紀日本では実際の日月の運行と暦との間に二日間のずれが生じていた。そこで春海は当時最高峰の暦法と考えられた中国元の「授時暦（じゅじれき）」に基づき、江戸・京都での観測データを盛り込んで、日本の経度に適合させて作成したのがこの『貞享暦』である。暦法書は秘書であったので出版はされず、写本でのみ伝わっている。

（該当部分を見る：https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100259772/viewer/234）

※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ（https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html）を必ずご確認ください。

第3回EAJS日本会議

九月十五日に筑波大学でEAJS日本会議が開催されました。当館からは谷川、神作、恋田、宮本、粂、ノットの六名が「Picture Scrolls and Illustrated Books in 17th Century Japan（一七世紀の絵巻と絵入本）」というパネルテーマで登壇しました。各発表では当館のデータベースを活用した研究が報告されました。

「国文学研究資料館蔵『烏帽子折物語絵巻』断簡をめぐって」（粂特任助教）では、当館所蔵の絵巻断簡（データベース登録名『幸若舞断簡』）と同系統の絵巻を使用した発表が行われました。

「一七世紀後半の絵巻制作と絵入り版本―国文学研究資料館蔵『子易の本地』を例として―」（恋田准教授）では、最近当館所蔵となった『子易の本地』を例に発表が行われました。

「絵入歌書刊本の展開―江戸前期を中心に―」（神作教授）では、『百人一首像讃抄』（延宝六年刊）、『雲井のさくら』（天和三年刊）などを取り上げて発表が行われました。

「国文学研究資料館蔵資料から見る一七世紀文学と茶の湯―西鶴を一例に」（宮本特任准教授）では、西鶴作品における茶の湯利用を例に、「新日本古典籍総合データベース」の画像利用方法も紹介されました。

東京藝術大学附属図書館の貴重古典籍約560点をデジタル公開

九月に東京藝術大学附属図書館の貴重古典籍のうち556点を「新日本古典籍総合データベース」で公開しました。

https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/list-tkgl.html

イベント報告

■第二十一回図書館総合展
十一月十二日（火）～十四日（木）（於パシフィコ横浜）

■第五回日本語の歴史的典籍国際研究集会
十一月十五日（金）（於国文学研究資料館大会議室）

海外における情報発信

■九月二十一日（土）にブルガリアで開催されたThe 30th EAJRS Conference（第30回日本資料専門家欧州協会年次大会）において「The recent progress in the Database of pre-modern Japanese works and the other NIJL's online services-2019（「新日本古典籍総合データベース」の最新動向と国文学研究資料館のオンラインサービス）」と題した発表を行いました。

また、今大会では当館としてはじめて、ブース及びワークショップ出展を行い、本事業の取り組みを紹介しました。

協定書・覚書の締結

・中津市、中津市教育委員会　（覚書　十一月十三日）

ふみ 第14号は、令和2（2020）年6月発行予定です。

■表題の背景色は瑠璃色（るりいろ）です。平安初期に書かれた『竹取物語』では「金、銀（しろかね）、瑠璃（るり）色の水、山より流れ出でたる」の記述があります。正倉院には瑠璃盃などが収められています。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の『方丈記』（本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本）を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所（現IHI）創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」（活版印刷見本帳）を利用しています。

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター
第13号
〈発行日〉
令和2（2020）年1月15日
〈編集・発行〉
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター
〒190-0014
東京都立川市緑町十一三
TEL 050-5533-2988
FAX 042-526-8883
http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/

『鳥獣絵巻 十二類歌合』がご覧になれます。
携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。